

# 複合動詞の意味推測における文脈量と第二言語習熟度の影響

谷内 美智子

## 1. はじめに

第二言語（以下、L2）語彙学習は一般に学習者の自主学習に任される部分が大きく、教室内で語彙に特化した学習が行われることはそれほど多くない。特に中級以上のレベルでは、未知語に出会った時には辞書に頼り過ぎるのではなく、文脈からの情報を活用して意味を推測することが必要となる。しかしながら実際には、意味推測の際に文脈からの情報が必要な場合と、文脈<sup>1</sup>からの情報がそれほど必要ではない場合がある。その理由の一つとして、当該語の意味的な透明性が関係してくることが挙げられる。

学習者にとって学習困難な語の一つに、日本語の複合動詞が挙げられ、学習方法（松田 2004）、母語話者と学習者の使用状況や知識の比較（陳 2007；白 2007）、動詞の組み合わせ（何 2010）など、幅広い研究が行われている。複合動詞が学習困難な理由の一つとして、複合動詞には「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」の二種類あることが挙げられる（影山 1993；由本 2005）。統語的複合動詞とは二つの動詞が統語的な操作によって結合したもので、前項動詞が後項動詞の項になるものを指す。例えば「読み終わる」であれば「読むことが終わる」を、「使い慣れる」は「使うことに慣れる」を意味するため、意味的透明性が高いと言える。一方、語彙的複合動詞は意味の慣習化、語彙化が進んでいるために、意味的透明性が低い。例えば、「飲み歩く」は「何件もの店を回って飲む」を意味し、「飲む」ものは酒類に限定される。

松田（2004）によると、日本語学習者は未知の複合動詞に出会った際、「前項動詞と後項動詞の意味を足す」というストラテジーを取ることが多い。統語的複合動詞は意味的透明性が高いため、前項動詞と後項動詞の意味を足すことで、全体の意味を引き出すことがある程度可能である。語彙的複合動詞の場合、前項動詞と後項動詞の意味を足すだけでは正

確な意味を導き出すことが困難であることから、正確な意味を推測するためには文脈からの情報を活用することが必要であると考えられる。

また、未知語の意味推測に文脈からの情報を活用する場合、L2 習熟度が高い方が正確な意味推測ができるものの、当該語の構成要素からの意味推測には L2 習熟度は影響しないことが指摘されている（谷内・小森 2009; Kondo-Brown 2006; Mori & Nagy 1999）。このことから、日本語の複合動詞の意味推測において、統語的複合動詞は L2 習熟度や文脈からの情報量の影響を受けないが、語彙的複合動詞は L2 習熟度が高く、かつ意味推測に利用できる情報量が多いほど正確な意味推測ができると予想される。

## 2. 研究課題

本研究では、複合動詞の意味推測の際、文脈からの情報量と L2 習熟度の影響がどのように現れるのかを検討することを目的とする。具体的には、以下の四点を研究課題として設定する。

- (1) 語彙的複合動詞の意味推測において、L2 習熟度が同程度の場合、文脈からの情報量が多くなると正確な意味を推測できるか。
- (2) 語彙的複合動詞の意味推測において、文脈からの情報量が同程度の場合、L2 習熟度が高いと正確な意味を推測できるか。
- (3) 統語的複合動詞の意味推測において、L2 習熟度が同程度の場合、文脈からの情報量は意味推測に影響するか。
- (4) 統語的複合動詞の意味推測において、文脈からの情報量が同程度の場合、L2 習熟度は意味推測に影響するか。

これらの課題を検討するため、本研究では文脈情報量、L2 習熟度、複合動詞の種類の三要因を設定した。

### 3. 研究方法

**対象者** モンゴル語を母語とする中上級レベルの日本語学習者 54 名である。モンゴル国内の大学に在籍し、日本語を主専攻か副専攻で学習している。

**L2 習熟度** SPOT (ver. D, E) の平均値 42.44、標準偏差 9.65 である。本研究では平均値 +0.5 標準偏差 (48) 以上の得点群を上位群、平均値 -0.5 標準偏差 (38) 以上から +0.5 標準偏差 (48) 未満の得点群を中位群、平均値 -0.5 標準偏差 (38) 未満の得点群を下位群として弁別した (表 1)。

表 1 SPOT 得点

	平均	最大	最小	標準偏差	N
全体	42.44	59.00	20.00	9.65	54
上位	52.53	59.00	48.00	3.55	19
中位	43.00	47.00	38.00	2.98	17
下位	31.28	37.00	20.00	4.76	18

注：満点は 60 点満点

**分析対象語** 複合動詞 31 語（語彙的複合動詞 16 語、統語的複合動詞 15 語）で、選定の際は前項動詞と後項動詞が『日本語能力試験出題基準』の 2 級から 4 級の語で構成されていることを条件とした。また、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の弁別は影山（1993）に従った。

語彙的複合動詞：居合わせる、言い寄る、言い渡す、歌い上げる、置き忘れる、押し通す、買い戻す、吸い取る、出し抜く、泣き落とす、飲み歩く、持ち直す、もみ消す、寄り掛かる、笑い飛ばす、割り切る

統語的複合動詞：歩き過ぎる、書き換える、書き忘れる、數え直す、頑張り通す、聞き飽きる、しゃべり続ける、出し遅れる、助け合う、食べ残す、使い慣れる、泣き出す、登り切る、話し終わる、読み始める

**意味推測の際の文脈情報量** 本研究では以下のように意味推測の際の文脈情報量を定義した（表 2）。また、提示文作成には日本語能力試験 3 級、4 級の語を中心に作成した。

単独条件：当該語のみを提示する。

単文条件：単文の中で共起語とともに提示する。

複文条件：複文の中で共起語と意味推測を促す情報とともに提示する。

**意味推測の形式** 四枝選択式（表 3、表 4 参照）。

**調査の流れ** 三回に分けて実施した。受けていないテストがある対象者は、分析から除外した。

①SPOT と事前テスト（SPOT と事前テストは同じに実施。単独条件の意味推測。）

②意味推測テスト（事前テストから数日後に実施。単文条件と複文条件の意味推測。）

③意味保持テスト（事前テストから約 1 ヶ月後に実施。ただし、本研究では分析対象外。）

### 4. 結果と考察

複合動詞の種類別に、文脈情報量ごとの意味推測の平均点を表 5 に示す。なお、語彙的複合動詞は 16 点満点、統語的複合動詞は 15 点満点と満点が異なるため、それぞれ 100 点満点に換算した。

語彙的複合動詞の意味推測において文脈情報量と L2 習熟度がどのような影響を及ぼすかを検討するため、文脈情報量要因（単独条件、単文条件、複文条件 被験者内要因）と L2 習熟度要因（上位群、中位群、下位群 被験者間要因）の  $3 \times 3$  の二元配置の分散分析を行った。その結果、文脈情報量要因 ( $F(2, 102)=106.178, p<.001$ )、日本語習熟度要因 ( $F(2, 51)=9.970, p<.001$ ) の主効果が有意であった。また、交互作用も有意であったため ( $F(4, 51)=4.456, p<.01$ )、単純主効果の検定を行った。

はじめに文脈情報量要因の影響を検討したところ、上位群 ( $F(2, 102)=68.04, p<.001$ )、中位群 ( $F(2, 102)=30.93, p<.001$ )、下位群 ( $F(2, 102)=17.91, p<.001$ ) のいずれにおいても文脈情報量要因の主効果が有意であった。そこで、いずれの間に差があるのかを確認するため、ボンフェローニの多重比較を行った。その結果、上位群、中位群、下位群の全て

表 2 文脈情報量の例（「出し抜く」の場合）

①単独	②単文	③複文
だぬ 出し抜く	たにん だぬ 他人を出し抜く。	わたし ほか ひと だぬ せいこう おも 私は、他の人を <u>出し抜いて</u> まで成功したいとは思わないが、そうすることが ひつよう とき 必要な時もある。

表3 語彙的複合動詞の選択枝の構成（例「出し抜く」）

1	正答（文脈からの情報を参考することで得られる意味）	Бусдаас түрүүнд юмийг хийх (他の人よりも先に物事を行う)
2	前項動詞と後項動詞の意味を足すストラテジーで導き出される意味	Юмийг гаргажк ирж татах (ものを取り出して引っ張る)
3	調査対象語に使われている漢字から連想される意味	Албан байгууллагаас гарах (組織から抜ける)
4	無関係な意味	Бусад хүнээс гүйх (他の人にお願いする)

表4 統語的複合動詞の選択枝の構成（例「書き忘れる」）

1	正答（前項動詞と後項動詞の意味を足すストラテジーで導き出される意味）	Бичихээ мартах (書くことを忘れる)
2	文脈から得られる情報と矛盾しない意味	Бичсэн болов уу үгүй болов уу санаа зовох (書いたかどうか気になる)
3	調査対象語に使われている漢字から連想される意味	Мартсан байсан зүйлээ бичих (忘れていたことを書く)
4	無関係な意味	Агууллагыг нь эргэн санах (内容を思い出す)

において、単独と單文、単独と複文、單文と複文のいずれの間も有意であった。

さらに L2 習熟度の影響を検討したところ、単独条件における L2 習熟度要因の主効果は有意ではなかった ( $F(2, 51)=1.73, n.s.$ )。單文条件 ( $F(2, 51)=7.18, p<.01$ )、複文条件 ( $F(2, 51)=10.76, p<.001$ ) では L2 習熟度要因の主効果が有意であった。單文条件、複文条件のそれぞれでどこに差があるのかを確認するため、ポンフェローニの多重比較を行ったところ、單文条件では上位群と下位群の間が有意であったが、上位群と中位群、中位群と下位群の間は有意ではなかった。複文条件では、上位群と中位群、上位群と下位群の間が有意であったが、中位群と下位群の間は有意ではなかった。

次に統語的複合動詞の意味推測において文脈情報量と L2 習熟度がどのような影響を及ぼすかを検討するため、文脈情報量要因と L2 習熟度要因の  $3 \times 3$  の二元配置の分散分析を行った。その結果、文脈情報量要因の主効果は有意ではなかったが ( $F(2, 102)=1.780, n.s.$ )、L2 熟度要因の主効果は有意であった ( $F(2, 51)=20.801, p<.001$ )。また、交互作用も有意ではなかった ( $F(4, 51)=.609, n.s.$ )。L2 習熟度要因のいずれの間に差があるのかを確認するため、ポンフェローニの多重比較を行ったところ、上位群と中位群、上位群と下位群の間は有意であったが、中位群と下位群の間は有意ではなかった。

これらの結果をもとに、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の意味推測における文脈情報量と L2 習熟度の影響について考える。まず、文脈情報量の影響については、語彙的複合動詞の場合は文脈からの情報量が増えると正確な意味推測ができることが示されたが、統語的複合動詞の場合は文脈情報量に関係なく正確な意味推測が可能であった。このことは、当該語の構成要素からの意味推測のしやすさ、つまり意味的な透明性によって、意味推測の際に文脈からの情報が必要か否かが決まることを示している。

次に L2 習熟度については、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の両方で意味推測に影響を与えることが示された。語彙的複合動詞の場合、文脈からの情報が利用できない場合、L2 習熟度の影響が見られなかつたが、文脈からの情報を利用できる場合には L2 習熟度の影響が見られた。具体的には、單文条件では上位群と下位群の間に差が示され、上位群と中位群、中位群と下位群には差が示されなかつた。また、複文条件では、上位群と中位群、上位群と下位群に差が示され、中位群と下位群の間には差が示されなかつた。このことは、意味推測に文脈からの情報を利用することが可能な場合、L2 習熟度が高くなれば意味推測が正確になるが、どの程度の L2 習熟度が必要なのかは文脈からの情報量によって異なることを示している。統語的複合動詞の場合、上位群と中位群、上位群と下位群の間に差が示された

が、中位群と下位群の間には差が示されなかった。統語的複合動詞の意味推測は文脈からの情報に関係なく正確な意味推測が可能であるにも関わらず、L2 習熟度による影響が見られたことは、語彙的複合動詞とは質的に異なる部分で、L2 習熟度が統語的複合動詞の意味推測に影響を与えていたと考えられる。本研究で分析対象とした複合動詞は、前項動詞と後項動詞が日本語能力試験の 2 級から 4 級の間の動詞で構成されていることを条件とした。しかし、L2 習熟度が低い場合、それらの語の意味が未知であった可能性がある。つまり、統語的複合動詞の意味推測の手がかりとなる構成要素の意味が未知であったために意味推測が困難になったと考えられる。このことから、語彙的複合動詞の意味推測における L2 習熟度の影響は、文脈からの情報を活用する際に現れ、統語的複合動詞の意味推測における L2 習熟度の影響は、当該語の構成要素を活用した意味推測の際に現れると考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では複合動詞の意味推測において、文脈からの情報量と L2 習熟度の影響がどのようにあらわれるのかを検討した。その結果、文脈情報量の影響は語彙的複合動詞のみに見られるが、L2 習熟度の影響は語彙的複合動詞と統語的複合動詞の両方に見られた。統語的複合動詞は意味的な透明性の高さから L2 習熟度の影響は受けないと予測されたが、実際には L2 習熟度の影響を受けていた。

本研究の今後の課題は次の二点である。第一点は、項目分析の必要性である。本研究では語彙的複合動詞と統語的複合動詞の二つに分けて文脈からの情報量と L2 習熟度の影響を検討したが、個々の語が持つ特徴によって文脈からの情報量と L2 習熟度の影響の現れ方は異なると考えられる。複合動詞の意味的な特徴や構造の違いを考慮して、文脈からの情報量と L2 習熟度の影響を調べることも必要であろう。

第二点は漢字圏学習者を対象にした場合の影響の検討である。本研究では母語で得た知識、特に漢字

の知識の影響を排除するため、非漢字圏学習者を対象にした。漢字圏学習者も対象にすることで、母語で得た知識が複合動詞の意味推測にどのように影響するのか、また文脈からの情報量や L2 習熟度と母語で得た知識がどのように相互作用するのかを検討することが可能になるだろう。これらの点を踏まえ、今後も未知語の意味推測における文脈からの情報量と L2 習熟度の関係について研究を進めたい。

## 注

1. 本研究における「文脈」とは、谷内・小森（2009）にならい、未知語の意味推測に必要な言語的情報と考え、未知語が含まれる句、節、文、文章などを指す。

## 参照文献

- 何志明（2010）『現代日本語における複合動詞の組み合わせ—日本語教育の観点から—』笠間書院  
影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房  
国際交流基金・日本国際教育支援協会（2002）『日本語能力試験出題基準【改訂版】』凡人社  
陳曦（2007）「学習者と母語話者における日本語複合動詞の使用状況の比較—コーパスによるアプローチ—」『日本語科学』22, 79-99.  
白以然（2007）「韓国語母語話者の複合動詞「～出す」の習得—日本語母語話者と意味領域の比較を中心に—」『世界の日本語教育』17, 79-91.  
松田文子（2004）『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して—』ひつじ書房  
谷内美智子・小森和子（2009）「第二言語の未知語の意味推測における文脈の効果—語彙的複合動詞を対象に—」『日本語教育』142, 113-122.  
由本陽子（2005）『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』ひつじ書房  
Kondo-Brown, K. (2006) How do English L1 learners of advanced Japanese infer unknown kanji words in authentic texts, *Language Learning*, 56, 109-153.  
Mori, Y. & Nagy, W. E. (1999) Integration of information from context and word elements in interpreting novel kanji compounds, *Reading Research Quarterly*, 34, 80-101.

やち みちこ／国際交流基金日本語試験センター

Michiko\_Yachi@jpf.go.jp